様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２９ 年　 ６ 月 １１ 日現在

機関番号：２４５０１
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2013～2016
課題番号：２５７７０１４７

研究課題名（和文）印欧語族イタリック語派に観察される音韻変化の内的要因の研究

研究課題名（英文）Studies on Factors in Phonological Changes in Italic (Indo-European Family)

研究代表者
西村　周浩（Nishimura, Kanehiro）

神戸市外国語大学・外国学研究所・客員研究員

研究者番号：５０６０９８０７

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,100,000円

研究成果の概要（和文）：言語がその歴史上示す音韻変化は多岐にわたる。その個別事例の中には、生起の条件が明らかになっていないものも少なくない。本研究は印欧語族イタリック語派に注目し、とりわけその代表格であるラテン語からそのような事例を多く採取し、変化の背景要因を明らかにすることを目指した。その結果、印欧祖語からラテン語にいたる歴史の中で新たに生じたパターンがモデルとなって二次的にひき起こされた音韻変化、さらには語形の変化等があることが明らかとなった。

研究成果の概要（英文）：Any language undergoes a variety of phonological changes in its history. There are not a few cases whose conditions have still been unclear. This project focused on Italic (Indo-European Family), and by collecting as many examples as possible particularly from Latin, I tried to elucidate underlying factors behind the changes. As a result, I could identify phonological changes as well as morphological ones that had secondarily happened on the model of new patterns engendered in the history from Proto-Indo-European to Latin.

研究分野：人文学

キーワード：イタリック語派　ラテン語　延長階梯　長母音　elision　prosodic hiatus　Mars　Mavors

１．研究開始当初の背景

インドの古典語サンスクリット語がギリシア語・ラテン語などヨーロッパの諸言語とともに共通の祖先から分化・発展してきたものであるという仮説が William Jones によって提唱されたのは 18 世紀末のこと。それ以来、様々な言語を対象に音韻・形態・統語法の比較研究が行われ、そこから得られた構造的な対応関係から、「インド・ヨーロッパ（印欧）語族」が言語の一系統として設定された。そして、紀元前 4000 年頃に存在したとされる「インド・ヨーロッパ共通祖語（印欧祖語）」の再建、特定語派・言語の歴史の構築は、現在も世界中の多くの研究者によって行われている。

こうした伝統の中で、言語変化の規則的なパターンに関する研究も進み、その知見はある程度演繹的に応用可能となった。しかし、ラテン語をはじめとするイタリック語派においては、印欧祖語の段階から予見・予測するのが難しい変化もあり、そうした事例がどのような要因・条件によって生じるのかという疑問に対して詳しい研究が求められており、私自身、その課題に深く関心をもつようになった。

２．研究の目的

印欧語族の研究の中にあって、古代イタリア地域に存在したイタリック語派に属する諸言語は、長く世界中の研究者たちが関心を寄せてきた対象である。その代表的な位置づけにあるのがラテン語で、紀元前約 600 年以降、碑文や写本など数多くの資料を残しており、それらの実証的な研究が始まった 19 世紀以降、碑文集・原典校訂版・（語源）辞典・文法書、各種論文など様々な成果が生み出されてきた。21 世紀に入ってからもこうした活動は活発に続けられており、ラテン語以外のイタリック系言語でサベル諸語と称されるグループにも研究の好循環がもたらされている。

その流れに私自身、身を投じ、新たな知見の積み重ねに貢献すべく研究を進めてきた。その過程で、ラテン語などにおいて多くの具代例を有する変化事象と並んで、一見すると散発的とも思える変化の存在が目につくようになった。「散発的」と判断される理由として挙げられるのが、他の印欧諸語に類似の変化がほとんど見られない点である。言語の変化には気まぐれな点もあり、内的要因を探求するのが極めて難しいケースも少なくない。イタリック諸語の諸事例に関してもそのような判断がなされることが多かった。しかし、そう認識される可能性のある事例が本当に動機づけ困難なものかどうか――その判定を行う前に十全で適正な分析を行うことが必要であり、それが本件の研究目的であった。

３．研究の方法

ラテン語をはじめとするイタリック諸語がどのような変化を経て言語として資料に残された姿に至ったのか。この問題に取り組む際に私が原則としている方針は、(a) イタリック語派の諸言語が他の印欧諸語と相違する点をあぶり出し、その違いをひき起こした変化のメカニズムをつきとめる、(b) イタリック諸語内部において不規則性を見せる点を探り、その理由づけを行う、というものである。

今回も上記の基本姿勢を保持した上で、(b) で指摘した不規則な事例の中でも特に、一見したところ散発的と思われるものに焦点を当てた。こうした例を動機のないものとして安易に片づけるのではなく、言語内部の類例を再度洗い直すのはもちろんのこと、類型論的な知見の応用、さらには文化的な背景にも視野を広げることで、分析上一定程度の汎用性をもつ基本原理の発見を目指すべきゴールとした。本件の研究課題にある「音韻変化の内的要因」を、音韻論の領域において記述・分析するのは当然のこととして、文法以外にも言語文化にかかわるような部門に端を発するものがないか、という視点も採用した。

４．研究成果

（１）サンスクリット語やギリシア語のデータを概観すると、名詞・形容詞・動詞などの様々な文法カテゴリーにおいて語根の長母音化（延長階梯）が見受けられる。こうした現象は伝統的に印欧祖語から継承されたものであると考えられている。

対して、ラテン語は印欧祖語からそのような長母音化現象をほとんど引き継がなかったとされており、短母音（標準階梯）に置き換えられる場合がほとんどである。しかし、一部の語形、とりわけ名詞や形容詞に関しては長母音の存在が痕跡的に観察されており、これが印欧祖語から受け継がれたものなのか、あるいはラテン語内部の二次的な現象なのか迷う場合が少なくない。

私は以前の研究において、様々な事例の分析・分類を少しずつ進めていた。そして、英語の名詞 *suspicion* の語源にもなっているラテン語の *suspīciō*「疑い」が含む-*ī*-がなぜ長母音なのかという問題について先行して取り組み、論文として発表した。そこでの成果を足がかりに、本件では他の諸例を包括的に扱い、体系的な結論を導き出すことを目標とした。

まず、大局的な分類として、ラテン語内部で二次的に生じたと確実に考えられる長母音をほかの事例から切り離す必要があった。そうしたケースの主要な原因として挙げられるのは、閉音節におけるコーダの有声閉鎖

音の前で母音が延長されるというものである。この音変化はかなり規則的で、それゆえに類推によって当該条件を満たしていないような語にも適用された。

では、この説明に当てはまらないような長母音はどのように分析されるべきか。例としては形容詞 *sācri-*「神聖な場所や儀礼に関する」がしばしば挙げられ、これは類似の意味を有するものの語根が短母音である *sacro-*「神聖な」と対比的に考察されることが多い。印欧祖語の史的音韻論に基づくと、*sācri-*の長母音が直接祖語の延長階梯に遡ることはない。私は、ラテン語において *sacro-*のように短母音によって実現した形から、形態論的な理由で、あたかも印欧祖語の延長階梯のような *sācri-*という形が派生されたと主張した。これは、ある言語が独自の改変を加えつつも古い段階の音韻形態的プロセスを痕跡的に受け継いだと考えられる事例である。

（２）ラテン語の単音節語のうち長母音で終わる語あるいは母音＋*-m* で終わる語（例えば、*mē*「私を・私から」と *iam*「今や」）は、プラウトゥスやテレンティウスの喜劇作品において、後続する語が母音始まりの場合、韻律上二通りの振る舞いを示す。一つは、当該単音節語の長母音あるいは母音＋*-m* があたかもなくなるかのような読み方 scansion、もう一つは、長母音あるいは母音＋*-m* が音節として短くスキャンされ、一定程度音韻的実体性を保持する読み方である。一般的に前者の状況を elision、後者を prosodic hiatus という用語で説明する。

この二通りの読み方は、単音節語に特徴的な現象としてよく知られているが、二つの読み方のうちどちらが選択されやすいのかという問題に関しては先行研究においてほとんど議論されることがなかった。

本件ではこうした空白を埋めるため、端緒として、単音節語に別の単音節語が後続するケースに特に注目した。その結果、先行する単音節語が長母音で終わる場合には、elision と prosodic hiatus がほぼ同程度の頻度で起こるのに対し、母音＋*-m* で終わる場合には、prosodic hiatus の方が選択されやすいことが分かった。ラテン語の語末の*-m* は「弱く」発音される（先行母音の鼻音化を伴って）としばしば言われるが、本研究から鼻子音としての調音が歴史的に一定程度保持されていることが明らかとなった。

（３）古代ローマ世界において軍神として、ときに農業神として知られたマルス。ラテン語では *Mārs* という音形で表されるが、その別形として *Māvors* という語形も知られている。伝統的に、後者の方が古い形で、そこから*-v-* /w/の脱落およびその前後の母音*-ā-*と*-o-*の融合という音変化の結果、前者の形が得られたと考えられてきた。以前の私の研究において、こうした見解に対し疑義を呈した。と言うのも、ラテン語を含めた古代イタリアで話されていた諸言語（ファリスク語やウンブリア語）の碑文資料を見渡すと、*Mārs* に類する形が比較的古い時代にも観察され、*Māvors* の方が古いとは必ずしも判断できないためである。ラテン語の最古層の碑文には、MAMARTEI という語形が存在しており、二番目の/m/が/w/に変化（異化）することで、むしろ二次的に *Māvors* が生じたと考えられる。ただ、*Māvors* という形は一見すると古色蒼然とした音連続を含んでいる。例えば、ラテン語の動詞 *mālō* ‘prefer’は確実に *māvolō* に由来し、古形である後者には *Māvors* 同様*-āvo-*という連続が見られる。

本件においては、こうした言語学的分析を以前よりも精緻なものとした。*Mārs* という語形がありながら *Māvors* という別形がラテン語の語彙の中で市民権を得たのは、その擬古的風合いが祈願文など宗教色の濃い文脈にふさわしいという認識が話者の間で広まったためである――という主張はすでに前にも述べたことがあるが、ローマ文学の作家ごとに実際の使用に関してどのような傾向があるか深く掘り下げられないでいた。本研究ではその点について詳しい分析を進めることとし、*Māvors* の使用例を作家ごとに一つ一つ検討し直した。その結果、プラウトゥス、ルクレーティウス、ウェルギリウス、リーウィウスのような作家たちに *Māvors* を特別扱いする傾向がある点を見出した。言語の変化に文化的側面が強く影響した（それゆえに個人差も伴いうる）ケースであると言える。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計６件）

① Nishimura, Kanehiro. 2017. *Māvors* vis-à-vis *Mārs*: Linguistic history and cultural background. *Glotta* 93: 135–153. **査読有.**

② Nishimura, Kanehiro. 2016. Elision and prosodic hiatus between monosyllabic words in Plautus and Terence. In *Sahasram Ati Srajas: Indo-Iranian and Indo-European Studies in Honor of Stephanie W. Jamison*, ed. Dieter Gunkel, Joshua T. Katz, Brent Vine, and Michael Weiss, 264–275. Ann Arbor: Beech Stave Press. **査読無.**

③ Nishimura, Kanehiro. 2015. On Latin *strāgulum* and *strāgēs*: *-g-* and analogy. In *Words and Dictionaries: A Festschrift for Professor Stanisław Stachowski on the Occasion of His 85th Birthday*, ed. Elżbieta Mańczak-Wohlfeld and Barbara Podolak, 231–236. Cracow: Jagiellonian University Press. **査読無.**
doi:10.4467/K9315.25/16.15.4027

④ Nishimura, Kanehiro. 2014. Vowel lengthening in the Latin nominal lexicon: Innovation and inheritance. *Historische Sprachforschung* 127: 228–248. **査読有.**

⑤ Nishimura, Kanehiro. 2014. On accent in the Italic languages: Nature, position, and history. *Studia Linguistica Universitatis Iagellonicae Cracoviensis* 131: 161–192. **査読有.**
http://www.ejournals.eu/Studia-Linguistica
doi:10.4467/20834624SL.14.009.2017

⑥ Nishimura, Kanehiro. 2013. Review, Emmanuel Dupraz, *Sabellian Demonstratives: Formsand Functions* (Brill, 2012). *Kratylos* 58: 47–57. **査読無.**

〔学会発表〕（計７件）

① Onishi, Teigo, and Kanehiro Nishimura. Latin *crīnis* and Related Forms in Germanic. 27th Annual UCLA Indo-European Conference, 2015 **年** 10 **月** 23 **日**, **カリフォルニア大学ロサンジェルス校，ロサンジェルス（米国）.**

② **西村 周浩.**「Kiparsky **の母音交替モデルから見えるラテン語アクセント先史 」．京都大学言語学懇話会第** 98 **回例会，**2015 **年** 7 **月** 11 **日，京都大学（京都府・京都市）**

③ Nishimura, Kanehiro. The Roman king as an Indo-European distributer. 26th Annual UCLA Indo-European Conference, 2014 **年** 10 **月** 25 **日，カリフォルニア大学ロサンジェルス校，ロサンジェルス（米国）.**

④ Nishimura, Kanehiro. A linguistic approach to Lucretius' prayer to Venus: Mars and poetic tradition. 14th Congress of the International Federation of the Societies of Classical Studies (FIEC), 2014 **年** 8 **月** 26 **日，ボルドー（フランス）.**

⑤ Nishimura, Kanehiro. *Mārs* and *Māvors*: Linguistic history and cultural background. 2014 **年** 3 **月** 14 **日，オックスフォード大学，オックスフォード（英国）**.

⑥ **西村 周浩.「民間語源とマルス神」．第** 11 **回ギリシア・ローマ神話研究会，**2013 **年** 11 **月** 30 **日，大阪大学（大阪府・豊中市）.**

⑦ Nishimura, Kanehiro. 2013. A note on the scansion of monosyllables in Plautus and Terence: Elision or prosodic hiatus? 32nd East Coast Indo-European Conference, 2013 **年** 6 **月** 23 **日，アダム・ミツキェヴィチ大学，ポズナン（ポーランド）.**

６．研究組織
(1)研究代表者

西村　周浩（NISHIMURA，Kanehiro）
神戸市外国語大学・外国学研究所・客員研究員
研究者番号：５０６０９８０７